

素なる落成式を擧げぬ。

●札幌の天長節

例により十一月三日午前十時

豊平館に於て官民祝賀會を催ふせり、此日來會者三百名樓上大廣間にて祝盃を擧げ、園田長官の發聲にて陛下の万歳を三唱し、烈々洋々の裏に散會せり。

●女子教育の演説

札幌の帝國婦人協會支部に

て山田北海道廳視學官の行爲教育の談話あり、函館美以教會にては江原素六氏の家庭教育と婦人の演説などありたり。

●十一月の北海の天地

小春の日並うららかに

残りの胡蝶菊に戯れ、龍田姫の織なせる錦の帷かゝげつ、乙女賤女の遊び暮せし北海の秋候は、何時しか過ぎて今朝は小雨に交る玉霞の軒端を叩く音寂しく、一家爐邊に團居して昔話などに耳を

樂ましむるの時とはなりぬ、温度は華氏の三十二度を示せり。

新刊紹介

▲畜類のまごころ 一冊 本田増次郎著

其はしぎの終りに「皆さんこれを讀んだ後で、一ツでも首筋をバタ／＼と叩いてやり一言でもやさしい聲をかけてやつて御覽なさい、どれ程嬉しがるかも知れませぬ」と書いて居る。なる程この本を見ては如何程情を知らぬ人であっても、自づと動物に對するやさしき心が起るに違ない。其目的の爲めに此書はかゝれたので、牛や馬がどれ程主人思ひなもので、どれ程恩に感ずるものであるかを、面白く分り易く、幾ツもの例に依つて書いたものである。附録には動物虐待防止會の趣意書がある。一般の人には勿論だが、別して動物とは親しい關係のある子供などに讀んで聞かせたいものである(定價一冊五錢、發行所 神田小川町九、開發社)

▲少年世界文學 毎月發行

兒童の讀み本として、毎月續てて發刊せんとするもの、第一篇 ふしぎの魚、第二篇 狼太郎、第三篇 神代の話など收めたり。書物の体裁は美麗にして印刷の鮮明、挿繪の精巧、此點既に優に從來のに卓絶せり。筆者は誰人とも知らざれど、毎篇坪内博士の

校閱を経たり。世界文學と稱するの故を以て、其材料は東西廣く之を採りたり。讀んで面白く且つ、三篇までに於ては、文字の形式、内容の材料、共に最も注意したる跡見えたり。新年の年玉などには以て來いの品といふべし。(定價一册拾貳錢) 發行所 神田 暮神保町九、富山房)

▲豊國新聞 第四十四號

滿三年に達したさいふ祝ひで、本號は紙面を大に擴張した。が、廣告と祝詞が大に紙面を埋めて居る。短篇小説、名家の傳などあり、殊に劇に關する記事が最も多い。料理法などは家庭向として宜しい様に思ふ(月三回 發行所 京都府葛野郡朱雀野村王生 豊國新聞社)

會 報

第廿七常會

明治三十五年十二月六日午後一時三十分女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會せり出席者會員四十四名同伴者數名にして會員横山榮治君は、フレイベル氏と新教育學に付きてさいふ題に於て、フレイベル氏の教育主義が、あらゆる方面に於て、現今新教育學の骨子となれることを縷々演述せられたり、次ぎて東基吉君は、幼稚園に於て六ヶ敷事を教ふることの、フレイベル氏の主意に反するのみならず、抑々又現今教育學の理法に背けるものなること

に付きての話あり、野口ゆか子君は、華族女學校幼稚園に於ける保育上唱歌を幼児に歌はしむるに付きての有益なる實驗談あり、後會員相互の自由談話を以て四時半閉會したり

入會之部

麴町區下六番町四八
赤坂區溜池五番地

轉居之部

深川區八名川町四〇荒木伊三郎方へ
南葛飾郡葛西村葛西小學校へ
三重縣四日市堅町井島方中村方へ
大分縣大分郡大分町へ
本郷區弓町二ノ二三へ
横濱市宮崎町三五松澤方へ
芝區新堀一七へ
栃木縣安蘇郡葛生村

會費領收

自十一月二十六日
至十二月十五日

一金一圓二十錢	自三十五年四月	岩崎かの
自三十五年三月	鳥居敏三郎	
一金二十錢	自三十五年十一月	榎本常
自三十五年十二月	川口雪枝	
一金一圓	自三十五年七月	
自三十五年六月		
一金一圓	自三十六年三月	